

美・談論・公共性—新しい市立美術館に思う

金田 晋 (広大マスタース会員)

昨年末 (12 月 19 日)、下関市立美術館で「美と公共性—公立美術館を考える—」という表題で講演した。常識的には、この二つの語、「美」と「公共性」とは相互に相容れないように聞こえるかもしれない。その思い込みからの解放の必要を語った。

美は、ひとり静かに味わい愉しむもので、公共 public とは相容れない、後者は群れ、公衆を思い浮かべるからである。じっさい、日本の美術館に行くと、「お静かにお願いします」と記されている。仲間と連れ立って行って、一枚の絵の前でその絵のことを話そうものなら、展示室の隅にすわっている女性あるいは男性が近づいてきて、「話さないように」と注意される。友と、あるいは娘と連れ立って行っても、まるで一人であるかのように、沈黙して絵の前に立つ。美を享受するのは孤独の瞬間だ。それが鑑賞のマナーであるかのようなのだ。自分は一枚の絵の中のサツとはかれた筆の勢いに感動しているのだが、隣に立つ友人が何に気をとられているのだろうか。色使いなのか、作家が絵の中に忍ばせたちょっとした工夫なのか。それともそこに描かれている風景からかつて訪ねた土地を思い出しているのだろうか。

ぼくの経験した欧米の美術館は、様子がちがっていた。絵の前で、先生が引率した生徒をすわらせて、その絵の解説をしている。声が響く。独りで入館した客は、その説明に聞き耳を立てている。子どもたちのざわつきも聞こえる。仲間で来た客がいる。一人は絵のある箇所を指さしながら何やら話して、もう一人が相槌をうっている。

美的体験には、ある種の集中力が必要である。それを乱されたくない。だから、その場に関係のない話、選挙の票集めの話しなぞされたら困る。これから行く仕事の予定なども聞きたくない。でもその絵のことについてなら、雑音にならないはずだ。人間の耳は、必要なものだけを聞きとるようにできている。そこが人工補聴器とのちがいだ。どこかで絵につながっている話しをしているなら、かえって当初の美的体験に上乘せしてくれることもある。

18 世紀末、美は私個人の体験だと定義して、近代的美意識のパラダイムをつくった哲学者がいる。イマヌエル・カントである。かれは『判断力批判』という有名な書物の中で、美的体験時に働く美的趣味判断は4つの契機（質、量、目的、様相）をもつとした。質から見た第1の契機は、「趣味とは眼の前の物あるいは思い浮かぶ表象を、ただ好き嫌いによって判定する能力」と定義し、その際「いささかの関心ももちこまない。」ことをよしとした。ここで「関心」とはその物に対する評判とか道義心とか損得勘定のようなものを意味していた。長い間、カント解釈ではこの契機が強調され、「無関心の美学」と呼ばれたりした。だが前世紀の80年代から、量から見た第2の契機のほうが大きく取り上げられるようになった。「概念なしに、普遍的に allgemein 好まれるものが美しい。」「概念なしに」とはコトバでの論証

とか説得なしにと、言い換えてもよい。そのようなものを横に置いて皆で愉しむ。「普遍的に」とは「皆で」ということだ。カントはここで *publike* (公共で) という語をつかう。*gesellig* (社交的) という語もつかう。自分が美しいと思えば、他人もそう思うはずだ、同意してほしい。「主観的普遍性」、主観的でありながら他人にもその判断を共有してもらいたい。だがときには、それが不当に他人に美しいという同意を押し付けることもあるだろう。隣にいる者は、かえって迷惑がっていることがあるかもしれないことを、カントは知っていた。それでも同意を強要できるのは、美しいという感情の特権だ。‘*Allgemeinguelteigkeit*’ はカントの邦訳書では「普遍妥当性」という硬い訳語をあてている。だがそれは「普遍的だと思える。ふつう普遍的と認められているが、そうでないこともある。」という意味である。相手は「ノー」と拒むかもしれない。それでも同意、相槌を求める。それが「美しい」と感動した者の性(さが)なのだ。そのすれ違いが、美的感動をさらに広く、深くして行くこともある。「他人ガドウ思オウガ、オレガ気ニ入レバソレデイイ。」は「美しい」という判断でないのである。

趣味判断の第2契機(量)が読み直された頃、ユルゲン・ハーバーマスの『公共性の構造転換』がヨーロッパの若者層でベストセラーになっていた。「公共圏 *public sphere*」がキーワードだった。近代社会が作り上げた「国民国家」は既に体制が硬直化してしまっている、むしろ18世紀にロンドンで3000店を超えたというカフェが、近代市民社会のひな型である。テーブルを囲んで話題が盛り上がり談論はいつ果てるともなく続く。もう一つの例にあげるのは、その同じ頃、パリのルーヴル宮殿の一角が美術展に開放され、サロンとよばれていた。画家、批評家、画商、愛好家等が会場いっぱいになり、盛況であった。近年、佐々木健一東大名誉教授の1000頁に及ぶ畢生の労作『ディドロ「絵画論」の研究』(中央公論美術出版部)に、長文の書評を欧文誌に書く機会があり、ディドロの多くの「サロン評」にも眼を通したが、それらをとおして当時の批評、書簡、紙誌に載る記事の活気と内容の濃密さを知った。身分も学歴も職業も年齢差も超えて続ける談論(談話と議論)、今様に言えばコミュニケーションが「公共性」の活動原理にあげられた。

カフェやサロンという18世紀に生まれた特有の集会形式が呼び起こされ、談論を保障せよという自由への意志が80年代末「ベルリンの壁」を壊し、国家間の東西冷戦体制を過去のものにしていった。私は下関市立美術館の講演で、戦後広島立町界隈の焼け跡に生まれた掘っ立て小屋の並ぶ飲み屋街なめくじ横丁と、そこに開いた画廊鼻の歴史模様を紹介し、それを「公共性」空間の広島ヴァージョンとして語ってみた。

日本の美術館は、静かすぎるように思う。沈黙して感動を自分の心にしまし、それをよしとされる。観客は、作品を有難く拝観するだけ。だがそれと反対の場面があつていい。作品の前に「公共圏」が広がっていいのでないか。特に公立美術館は、そのような場であつてもいいのではないか。

惟えば、世の中は、議論に結論を求めすぎる。「いつまでクダクダ話しているのか。」と怒られることもある。だが結論を急がないで、むしろ取り上げる話題に潜む問題性を広め深める談論があってもいいではないか。

絵の前は、公共性のある場であってよい。コーヒーもウイスキーも日本酒も出ないが、談論のコトバが自由に行き交う場であっていい。そうした談論法をトレーニングする場になっている。美は談論にむしろ適している。新しい市（公）立美術館に、それを期待している。

私は、わがマスターズが支援するちゅーピーカルチャセンターで8年間月2回「近代美術の世界」という講座を開いてきた。出席者は美術を語り合う技術を学んでいる。